

都市河川の森づくり&水辺の自然再生

土地本来の自然の面影が著しく失われてきた都市部では、地域の自然に則した生物相豊かな都市緑地を形成していくことが求められています。とくに住宅・工場などがひしめく市街地では、貴重なオープン・スペースである河川の自然再生が重要です。国際生態学センターは、水辺植生の回復・創造を通じ、多様な生物の生息空間・移動経路(回廊)としての河川を再生させ、地域の人々のふれあいの場、いこいの場、学習の場など、河川が本来もっている多様な機能の再生に積極的に取り組みます。



図1

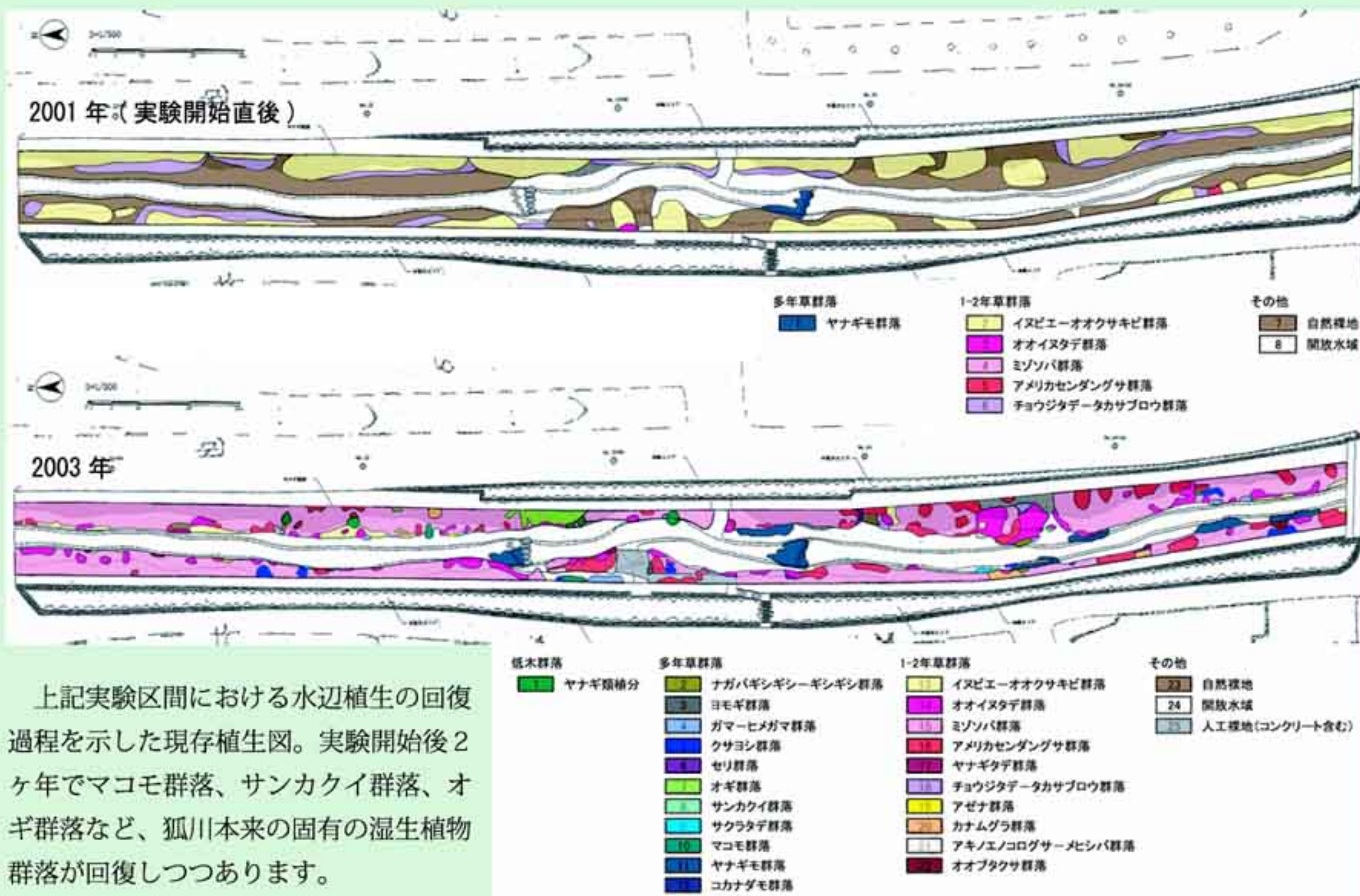
図1：著しく人工化された福井市内を流れる都市河川・狐川のかつてのすがた。

図2

図2：河岸では、潜在自然植生の主要構成種：タブノキ、シラカシ、スダジイ、エノキ、ケヤキなどの植栽による森づくりを実践。低水路では、傾斜の緩やかな低水敷をつかった後に放置し、自然回復に委ねながら水辺植生を誘導した。

図3

図3：実験開始後2カ年で河岸には高さ2~3mの樹林帯が形成され、水辺には多様な湿生植物群落が生着した。



上記実験区間における水辺植生の回復過程を示した現存植生図。実験開始後2ケ年でマコモ群落、サンカクイ群落、オギ群落など、狐川本来の固有の湿生植物群落が生着しつづいています。

住民参加の森づくり

いのちと遺伝子、それを支える清浄な大気と水資源をまもり、防災・環境保全機能を果たす、そして人々にやさぎを与える「いやしの森」を、どう増やしていくかに全力をつくすべき時代です。今すぐ、未来指向の「いのちの森づくり」を、行政・企業・私たち一人ひとりが、愛する人、子供たちの未来のために、足もとからはじめましょう。



住民参加で高架下に植樹



地域ボランティアの皆さんと1100人1300本植栽
(大分県日田市 2000年4月29日)



植栽後、3年目のすがた
(出雲市、2003年6月)

■植栽の手順



①平地ではマウンド、斜面地では編籠を施し、基盤を安定させる。表層土壌は排水良好で有機物に富むものとし、客土する場合には現地発生土(表層30cm程度)を利用することが望ましい。

②植栽には2~3年生の幼苗(ポット苗)を用いる。ポットの直径のおよそ1.5倍の大きさの穴を掘り、表層土壌になじませるようにポット苗を植える。



1.5倍



③植え付けの際は、深植えしないよう注意し、上から土をほつらかぶせるようにする。決して足で固く踏みつけない。平米あたり2~4本のポット苗を植え付ける。様々な樹木の混植・密植により、早期樹林化を図る。

④植栽後、表層浸食や雑草の侵入を防ぐため稲わらまたは木材チップによるマルチングを施す。このとき、現地発生土の伐採材を利用すれば地域資源の有効利用につながる。



地域社会と交流ネットワークづくり、パブリック・インボルブメント(PI)の実践

国際生態学センターは、生態学的な視点を社会に還元すべく、森づくりや自然再生に関わるエコツアー、植樹祭、研修、ワークショップ、学習会などを通じて積極的に地域との交流を図り、様々な取り組みを効果的に進めてゆくための交流ネットワークづくり、PI(パブリック・インボルブメント)を実践いたします。



植樹祭における技術指導
(横浜市鶴見区 2004年6月)



ワークショップを通じた地域との交流
(河和田川の環境を考える会 2004年1月)



小学校における環境学習の支援
(福井県鯖江市立河和田小学校 2003年11月)